
MOON-4 夜叉 6

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON－4 夜叉 6

【Nコード】

N5739M

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

和人と秀の前に現れた桜は満月の輝きの『紅』の意味を知っていた。桜と榊をめぐって新たな闘いが始まる。

MOONシリーズ第4段 夜叉－1です。

夜叉一1（前書き）

はー、原稿の目処がついてきた（¥）。。。。

夜叉―1

一人。

和人は新宿東口を抜けた区役所通りを歩いていた。秀と別れてから随分と時間が経っていた。

桜の花びらが何処からか舞い込んで来る。

深夜の人気のない花園神社へ和人は入ると、静かに言った。

「いるのだろうか？」

優しい微笑を浮かべて。

「御側に、いつでも。」

樹木の陰からよく透る女性の声がした。

そして、白い着物の袂を夜風に靡かせながらひっそりと、立ち止った彼に近づいて行った。

神社にも桜の花が満開に咲いている。

風が優しく2人を暗闇の中包み込んだ時、

「夜叉。」

和人は彼女の名を呼んだ。

「久しいのお、若様。」

和人と同じくらいの長身の女性は、その黒髪を簪で腰のあたりでまとめ、「あれから幾夜経ったのかの？」

「さてね。」

和人は正面に『夜叉』と呼ばれた女性を見据え、「お互い、年は儂く過ぎるものだからね。」

「左様。」

にこり、と夜叉は微笑む。

その笑顔に満足したかの様に、白い綺麗な指先を持つ夜叉が和人に手を伸ばすと何の違和感もなく彼女の体を彼は抱いた。

「やはり、若様は九桜とは違う。」

「そう？」

「そうじゃ——若様は暖かい。陽の光を知^ひっておる。」

「ふふ……」

胸元に夜叉を抱いたまま和人は苦笑した。

「秀のせいかな。」

「あの狼男^{ウルフガイ}の坊やの事かえ？」

「そう。」

「かもしれぬな。」

夜叉は顔を上げた。

深紅の唇に妖しい笑みを浮かべる。

「最近は『外』の坊やとも暮らしているらしいではないか。」

「夜叉は何でもお見通しだな。」

「で、今宵は何故^{わらわ}我をお呼びになられた？」

「先刻の」

と、つい先ほどまでプリンスホテルの前で繰り起こされていた九桜の『側』との鬭いを思い起こし、「あの鬭いは夜叉も知っているだろう。」

「御意。」

夜叉は頷いた。「どうやら九桜の直系が絡んでいたらしいの。」

「そう——桜というらしい。夜叉、心当たりは？」

「若様。」

夜叉は少し思案し、「確かにあの者は『濃い血』を持っておる——九桜に匹敵する程の。」

「じゃ、俺が何故、夜叉を呼んだか判るだろ？」

「……」

夜叉は目を細めた。

そして、視線を和人から天空の満月間近の月に移す。

いつもは、青白い光を放つ月が——何故か紅を放っている。

「……迷信じゃ。」

ただ一言、夜叉は呟いた。

「それが、今回はそうではないらしい。」

和人の顔から微笑が消えた。

「・・・まさか。」

夜叉が怯えた表情を浮かべた。

それを見届けて、和人は告げた。

「俺が九桜と闘って、奴を倒した時も月は『紅』だった。」

「――左様。」

夜叉は真剣な眼差しで、「しかし、倒れたのは九桜の方――若様ではない。」

「でも」

和人は一呼吸置いた。「今回は俺も勝ち目が無いかもしれない。」

「何を！」

神社の中に夜叉の声が響いた。「何故、そんな事を申す。あの夜だとして倒れたのは九桜の方――そんな若様が桜の直系如きに倒されるはずはない。」

「だから――九桜の直系だからこそ、俺は桜たちを倒すことは出来ない・・・」

和人は哀しげに目を伏せた。「俺は、九桜を倒す気はなかった・・・」

・・・

「何を・・・!!」

「・・・だから今まで、出来るだけ九桜の側への攻撃は最小限に留めてきた。だけど、『光』と『闇』の境界線を越える事は許されない。」

「・・・御意。」

「今度も」

和人は呟く様に言った。「『あの夜』と同じ闘いが起こる――帝王の座を巡っての。」

「若様、相手は九桜ではなくその直系に過ぎない。そこまで思慮深くならなくてもいいのではないのか？」

「ただ――一月が紅い。」

「・・・・・・」

「判るだろ、夜叉。」

「迷信じゃ、そんなの！」

夜叉はきつい口調で和人の瞳に訴えた。

「満月が紅く輝くのは、帝王の流した『血』の為だと――」

「そうだよ、夜叉。」

和人は答えた。

そして、再び夜叉を抱きしめた。

その白檀の香りのする香も抱き、

「今は、俺には秀や朝子、裕希がいる。俺を『昼の住人』として引き留めてくれる仲間がいる。」

「そうじゃ。」

「守りたい、みんなを。」

「その通り、若様。」

「だから、帝王の『側近』である夜叉にはどちらが真の帝王なのか問いただしたい。」

「・・・・・・」

夜叉は沈黙した。

花園神社の桜の枝葉が大きく揺れた。

「・・・・・・判らぬのだよ、我にも。」

「長年帝王の側近として仕えて来た夜叉にもか？あの桜という少女と櫛という青年。」

「彼らも若様に匹敵する『結界』を、しかも『この街』の『中』ではっている。」

「やはり、そうか。」

和人は左の親指を軽く噛んだ。「だから彼らが何処に居るか判らないんだ。」

「左様――若様の言う通り、今度の満月が決戦となるであろう。」

「頼みがある、夜叉。」

「何なりと。」

「『帝王』としての命だ――少しでも彼らの情報を集めてくれ。そして。」

そこで一呼吸置き、「俺の『血』をお前に預ける。」

「・・・・・・それ程の『覚悟』がおりかえ？」

「そう。桜と榊の情報を、動きを見るために。」

「承知。」

暗闇の中。

夜叉の瞳は紅に輝き、その頭上には二本の角が立っていた。

「しかし何があっても」

夜叉は真剣な面持ちで言った。「私の帝王は和人――若様お一人じゃ。」

「・・・・・・」

和人は沈黙した。

そして、

「夜叉。九桜はお前の一族を皆滅ぼしたが――夜叉の役目は唯一無二の『帝王』の側近に侍ること。」

「判っておる！」

夜叉は珍しく鋭い口調で、「・・・・・・だからこそ、若様の『血』を預かるのだよ。」

「夜叉・・・・・・」

沈黙が花園神社に訪れる。

そして。

和人は寄りそう夜叉の唇に、自分の唇を重ねた。

「――若様。」

夜叉は目を細めた。

「裕希と――朝子と秀を頼む。そして、少しでも早く桜たちの居場所を突き止めて欲しい。」

「御意。」

先ほどまでの艶やかな表情とは一転して、鬼一族特有の鋭い眼差しを和人に向けた。

満月まで、あと2日――

夜叉一1（後書き）

ご感想をお待ちしてます。 沢山アクセスがありますように（祈）・
・・・・ってか『2』は今週中か来週頭に仕上げなくっちゃ（時
間がないっ!!）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5739m/>

MOON-4 夜叉 6

2010年10月10日04時53分発行